

結論を押しつけ「説明」と言う 杉田

理解進んだからこそ反対強い 長谷部

違憲指摘でも安保採決強行 民主主義とは

安倍政権は高まる世論の批判を押し切り、安全保障関連法案を衆院通過させた。安倍晋三首相自らが「国民の理解は進んでいない」と認める中での採決の強行だった。長谷部泰男・早稲田大教授と、杉田敦・法政大教授の連続対談は今回、「違憲」との指摘を受けた法案の審議から、民主主義や社会にもたらした影響とその行方を展望する。

杉田敦・法政大教授 自民・公明の与党が採決を強行し、安全保障関連法案が衆院を通過しました。長谷部泰男・早稲田大教授 立憲民主主義の危機が新たな段階に入ったかと思われ、内閣が、憲法違反の法案を衆院に提出したことがすでに危機でしたが、衆院がそれを通過してしまっただけで、安倍首相が来議会で「夏までに成敗させる」と約束してしまっただけで、何としても成立させねばならないという「個人的事情」への配慮が背景にある。主権者たる国民を何だと思っているのでしょうか。

杉田 「国民に丁寧にかかりやすく説明していきなさい」。委員会採決後の、首相の発言には驚きました。説明とは、決める前に、合意形成のためになされるものでしょう。長谷部 反論を聞いた上で、説明したりする気はまったくありません。杉田 自らの結論をただ押しつけることを、安倍さんは「説明」と言っている。福島第一原発事故まで

憲法論はずせばブレキない 杉田

「右向け右」自律性なき多数決 長谷部

杉田 一方で、野党も権柄だったと認ざるを得ない。衆院憲法審査会で長谷部さんら憲法学者3人の「参事」だと指摘し、会感が連憲だという論点が前面に出た。ところが、野党の質問はその後も、技術的な論点や、政府側の答弁の細かい點の指摘に時間を費やして、それでは勝負になりません。長谷部 安全保障をめぐる議論の土俵はもともと拡大推進した側にも有利な

も合理的な根拠があったことになりそうです。そのような場合、憲法的自律性を行使するのから聞かれても、安倍さんは「総合的に判断する」と繰り返すばかりで、時々の政権に白紙委任し、時々の「国民の理解」を進んでいくという「不安心」が広がるとは当然です。長谷部 安倍政権で「総合的に判断」というのは、憲法に明記されたものではありません。明らかな憲法違反を容認する「相手を」まで行けば容認されるのか、わからない。個別的な衝突の可能性が、さらさら高まっています。

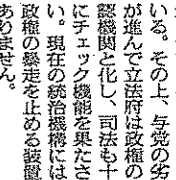
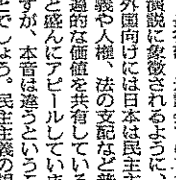
杉田 「違憲だ」と言っただけで十分責任を果たしてはいます。裁判にならなければ、検察官である政府・与党の「これが犯人だ」という主張には根拠がないと指摘するものが、非難士である野党の役割で、立証する責任はあくまで政府・与党の側にある。そのような役割分担

危機感動き出す主権者 長谷部

立憲主義浸透 勝負続く 杉田

杉田 憲法という極めて重大な規範が法案に突進し、世論の批判も強まっている時に、自民党の内部からこのままではまずいという声は出ています。長谷部 米議会での首相演説に象徴されるように、外国向けには日本は民主主義や人権、法の支配など普遍的な価値を共有していると感じてアピールしていますが、本音は違うところがあるように、民主主義の根

長谷部 だが、このままでは国民が、このままでは国のかたが、社会のあり方が壊れてしまふという危機感を募らせます。何とかなければと動いていきます。敗戦を経て、戦後70年の間に築いてきた立憲民主主義という国のあり方を、これからも維持できるかどうか、それだけ自分が使えぬ回路を使っている。国会に声を届ける。選挙で勝てば何をやるつもりか、というところではない。主権者は白紙委任してしまわなければならないから、おかしなところではあります。主権者が主権者としてあり続ける限り、勝負は続きます。



7/19朝日